

牛肉



◆飼養動向

30年2月現在の肉用牛飼養頭数、0.6%増加

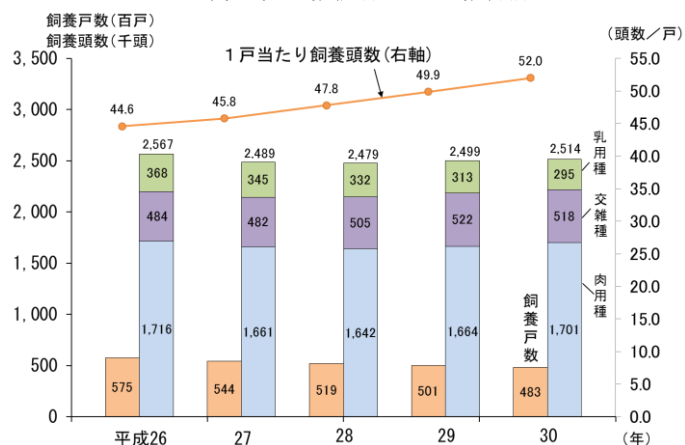
肉用牛の飼養戸数は、生産者の高齢化などによる離農の進行により、小規模層を中心に減少傾向が続いている。平成30年は、4万8300戸（前年比3.6%減）となった。

総飼養頭数は、22年以降減少傾向にあったが、30年は251万4000頭（同0.6%増）と2年連続で増加となった。品種別に見ると、肉用種は22年に発生した口蹄疫の影響などにより減少していたが、繁殖雌牛頭数が28年度以降増加傾向に転じ、30年は170万1000頭（同2.2%増）と2年連続の増加となった。乳用種は23年以降減少傾向が続き、30年は29万5100頭（同5.7%減）となった。交雑種は、子牛価格高騰を受けた酪農家での乳用種への黒毛和種交配率の上昇により増加傾向で推移していたものの、30年は51万7900頭

（同0.7%減）と3年ぶりの減少となった。

この結果、1戸当たりの飼養頭数は、52.0頭（同4.2%増）とやや増加した（図1）。

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」

注：各年2月1日現在。なお、30年は概数値。

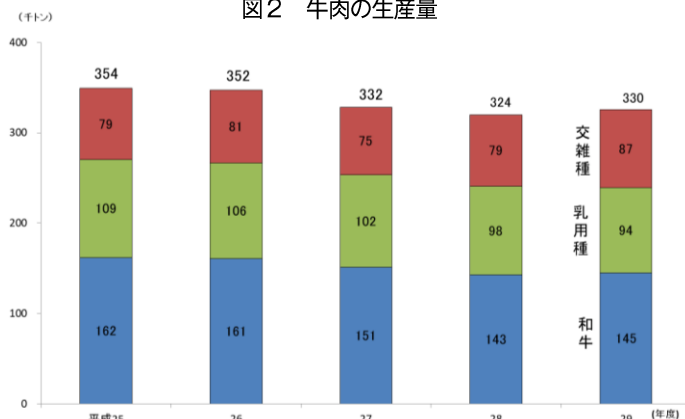
◆生産

29年度の生産量、1.7%増加

近年、高齢化に伴う離農の進行や22年に発生した口蹄疫、また、23年8月の大規模生産者の経営破たんなどにより繁殖基盤が縮小し、25年度以降、生産量は減少傾向で推移していた。こうした中、品種別の牛肉の生産量は、平成25年度以降、交雑種および乳用種の減少により減少傾向で推移してきた。しかし、29年度は、乳用種が9万3871トン（前年度比4.5%減）と前年度を下回ったものの、酪農家における乳用種への黒毛和種の交配率が高かったことから交雑種が8万6828トン（同9.7%増）と増加した。また、和牛は出荷頭数が5年ぶりに増加したことに加え、1頭当たりの枝肉重量も増加したことから14万5049トン（同1.8%増）と増加し、全体では32万9693トン（同1.7%増）

と5年ぶりに増加となった（図2）。

図2 牛肉の生産量



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：部分肉ベース。

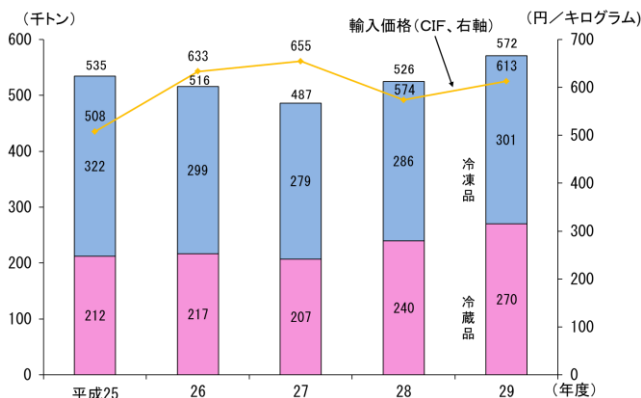
2：合計値には、外国種などを含むため、各内訳の合計と一致しない。

◆輸入

29年度の輸入量、豪州産、米国産ともに増加

牛肉の輸入量は、国内の生産量が減少する中で、比較的安価な輸入牛肉需要の高まりなどを背景に、平成20年度以降、増加傾向で推移してきた。25年度は、外食需要の増大や25年2月の米国産の牛海綿状脳症（BSE）に関する月齢緩和措置などを背景に、53万5134トン（前年度比5.9%増）とやや増加した。しかし、26年度は、一部外食チェーンの業績悪化に伴う需要の減少や為替の円安基調、米国西海岸港湾労使問題の影響などにより、51万6200トン（同3.5%減）と減少に転じ、27年度も現地相場高や円安基調の影響により、48万7098トン（同5.6%減）と前年度を下回った。28年度は、国産牛肉高から輸入牛肉需要が高まったことや、米国の現地相場安などにより、52万5694トン（同7.9%増）と3年ぶりに増加に転じた。

図3 牛肉の冷蔵品・冷凍品別輸入量および輸入価格

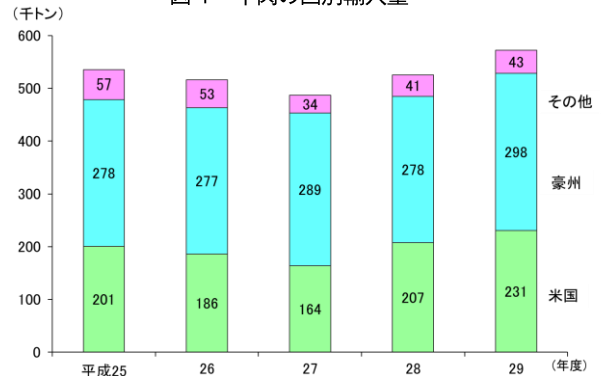


資料：財務省「貿易統計」
注1：冷蔵品にはくず肉などを含む。
注2：部分肉ベース。

29年度は、冷凍品において関税緊急措置（以下「セーフガード」という）が発動されたものの、好調な需要を背景に57万1854トン（同8.8%増）と2年連続で増加した（図3）。

29年度の国別輸入量を見ると、豪州産が29万7880トン（同7.3%増）とかなりの程度、米国産が23万606トン（同11.2%増）とかなり大きく、いずれも増加した（図4）。セーフガードの発動により冷凍品において米国産から豪州産へのシフトがみられたものの、外食需要などの増加により冷蔵品では米国産が大幅に増加したことから、輸入量の両国のシェア（豪州産52.1%、米国産40.3%）は前年度と変わらない割合となった。

図4 牛肉の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

◆消費

29年度の推定出回り量は5.0%増加、家計消費は4.1%増加

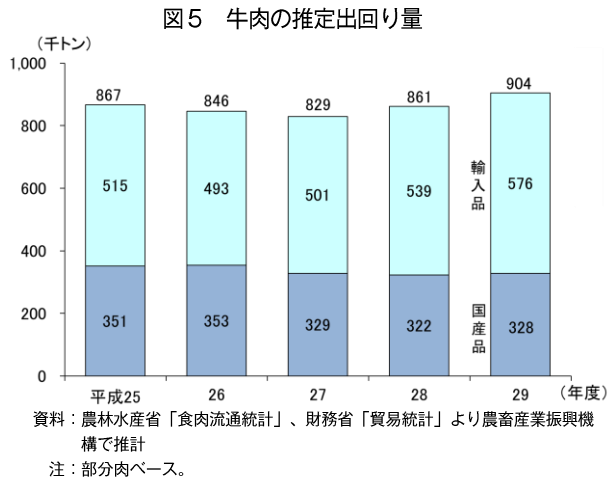
推定出回り量

牛肉の推定出回り量は、平成27年度は、輸入品は50万834トン（前年度比1.6%増）と前年度をわずかに上回った一方、国産品は32万8521トン（同7.0%減）と前年度をかなりの程度下回り、全体では82万9354トン（同2.0%減）と減少した。28年度は、国産品は

32万2435トン（同1.9%減）と前年度をわずかに下回った一方、輸入品は53万8565トン（同7.5%増）と前年度をかなりの程度上回り、全体では86万999トン（同3.8%増）と3年ぶりに増加に転じた。

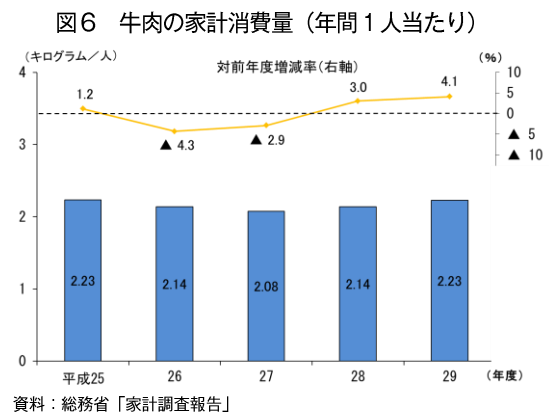
29年度は、焼肉業界が好調を維持するなど肉ブームの高まりに伴い、全体では90万3804トン（同5.0%増）と2年連続で増加した。このうち、国産品は、32

万8000トン（同1.7%増）とわずかに前年度を上回った。また、輸入品は消費者の低価格志向の高まりを背景に量販店などでの取扱量が増えたことから、57万5804トン（同6.9%増）と前年度をかなりの程度上回った（図5）。



家計消費

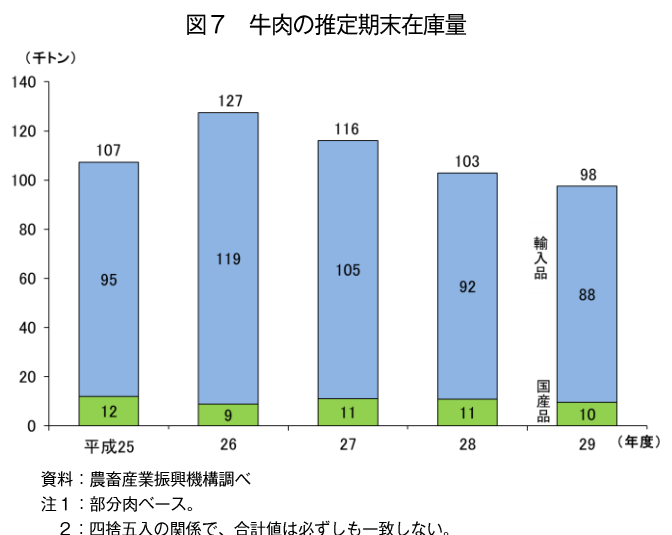
牛肉需要の約3割を占める家計消費は、平成22年度以降、景気低迷による消費の減退、東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う放射性セシウム検出問題などを背景に、減少傾向で推移してきた。27年度は、相場高による豚肉、鶏肉へのシフトなどにより年間1人当たり消費量は2.1キログラム（前年度比2.9%減）と3年度以降最少となったが、28年度は同2.1キログラム（同3.0%増）、29年度は安価な輸入品の増加もあり、同2.2キログラム（同4.1%増）と2年連続で前年度を上回った（図6）。



◆在庫

29年度の推定期末在庫量、5.1%減少

牛肉の推定期末在庫量は、平成27年度は、国産品が前年度を上回って推移する一方、輸入品の在庫調整が続いたことから、全体では11万5994トン（前年度比9.0%減）と前年度をかなりの程度下回った。28年度は、前年度から引き続き、輸入品を中心に減少し、10万2793トン（同11.4%減）と前年度をかなり大きく下回った。29年度は、9万7568トン（同5.1%減）と前年度をやや下回り、3年連続で減少となった。このうち、輸入品は8万8070トン（同4.3%減）、国産品は9498トン（同11.8%減）といずれも前年度を下回った（図7）。



◆枝肉卸売価格

29年度の和牛卸売価格、前年度を下回る

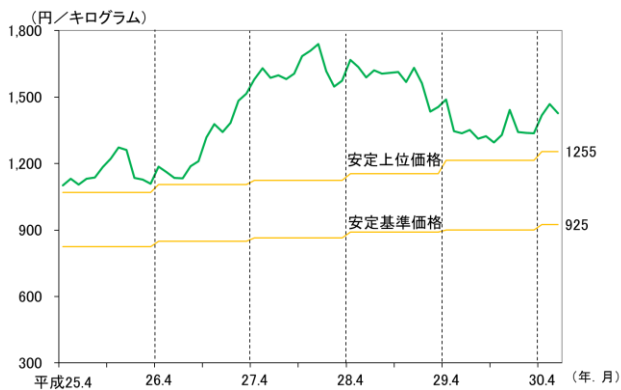
省令規格

牛枝肉卸売価格（東京・省令規格）は、平成27年度は、出荷頭数の減少の影響もあり、1キログラム当たり1622円（前年度比26.0%高）と高騰した。

28年度は、輸入量が増加したことや主に交雑種の出荷頭数が増加したことなどから、同1583円（同2.4%安）と前年度をわずかに下回った。

29年度は、前年に引き続き輸入量が増加したことや主に交雑種の出荷頭数が増加したことに加え、ここ数年の高値疲れから同1354円（同14.5%安）と前年度をかなり大きく下回った（図8）。

図8 牛枝肉の卸売価格（東京・省令規格）



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：省令規格の卸売価格は、去勢牛B2とB3の加重平均。

注2：消費税を含む。税率は、平成26年4月1日以降8%、それ以前は5%（以下同じ）。

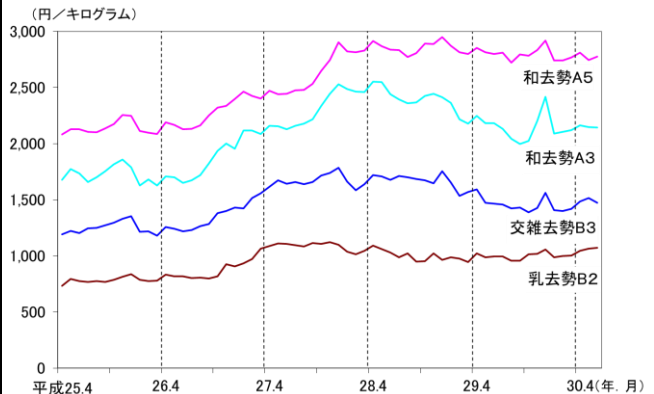
和牛

和牛（去勢）の卸売価格は、平成23年度後半から徐々に回復し、27年度は、全国的な出荷頭数の減少や輸入量の減少、インバウンド需要の増大、堅調な輸出需要などから、記録的な高値で推移し、A5が1キログラム当たり2634円（前年度比15.4%高）、A3が同2310円（同23.2%高）と大幅に上昇した。28年度は、前年度に続き、インバウンド需要や輸出需要などを背景にA5が同2854円（同8.4%高）、A3が同2392円（同3.6%高）と高水準で推移した。

29年度は、前年度を下回る卸売価格となったものの、A5が同2798円（同2.0%安）、A3が同2146円（同10.3%安）と高水準で推移した（図9）。

特に、年末年始の盛り上がりから12月の卸売価格は一時的に上昇した。

図9 牛肉の卸売価格（東京・種別）



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注：消費税を含む。

乳用種

乳用種（去勢B2）の卸売価格は、平成25年度は、競合する輸入牛肉価格が高水準で推移していたこともあり、1キログラム当たり784円（前年度比22.6%高）と前年度を大幅に上回り、26年度は同875円（同11.7%高）とかなり大きく上昇した。27年度も上昇傾向が継続し、同1085円（同24.0%高）と前年度を大幅に上回ったが、28年度は乳用種の肉質と競合する輸入牛肉の増加などを背景に同1000円（同7.9%安）と5年ぶりに低下した。

29年度は、生産量が減少したものの、量販店などで一定の需要があることから、同999円（同0.1%安）と前年度並みとなった。

交雑種

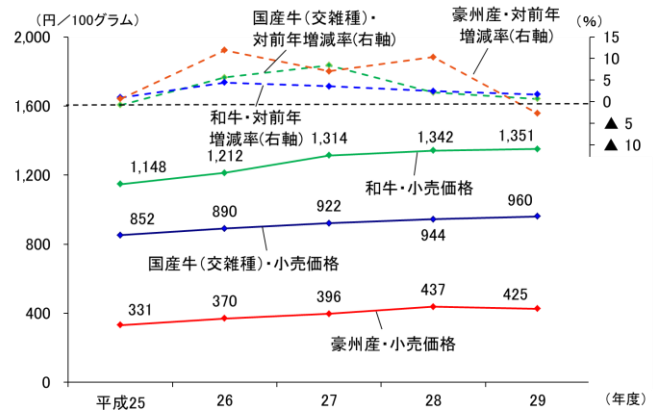
交雑種（去勢B3）の卸売価格は、平成25年度は、景気回復などもあり、1キログラム当たり1249円（前年度比12.8%高）とかなり大きく上昇した。26年度は、生産量の減少や和牛の相場高による交雑種への需要シフトなどもあり、同1351円（同8.2%高）とかなりの程度上昇した。27年度も上昇傾向が継続し、同1668円（同23.5%高）と前年度を大幅に上回ったが、28年度は、和牛よりも安価な交雑種の需要が堅調であったことから、同1670円（同0.1%高）と前年度並みとなった。29年度は、高値疲れや冷蔵品輸入量が増加したことなどから同1454円（同12.9%安）と前年度をかなり大きく下回った。

◆小売価格

29年度の小売価格、国産品は値上がり、輸入品は値下がり

牛肉の小売価格（サーロイン）は、枝肉の卸売価格の上昇に伴い、平成26年度以降、上昇基調で推移してきた。27年度は、相場高による価格転嫁が行われたことで、和牛は、1キログラム当たり1314円（前年度比8.4%高）、国産牛（交雑種）は同922円（同3.6%高）、豪州産牛肉は同396円（同7.0%高）と前年度を上回った。28年度は、国内生産量の減少や輸入牛肉需要の高まりなどを背景に、和牛は同1342円（同2.1%高）、国産牛（交雑種）は同944円（同2.4%高）、豪州産牛肉は同437円（同10.4%高）となった。29年度は、国産品の堅調な需要を背景に、和牛は同1351円（同0.7%高）、国産牛（交雑種）は同960円（同1.7%高）と前年度を上回った一方で、前年度から輸入量が増加した豪州産は同425円（同2.7%安）と前年度を下回った（図10）。

図10 牛肉の小売価格（サーロイン）



資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税を含む。

◆肉用子牛

29年度の肉用子牛価格、黒毛和種、交雑種は前年度比安

黒毛和種

家畜市場における黒毛和種の子牛取引価格は、繁殖基盤の縮小に伴う出生頭数の減少などにより、平成22年度から上昇傾向で推移している。27年度は、堅調な枝肉卸売価格に後押しされ、1頭当たり68万7000円（前年度比20.6%高）と大幅に上昇した。28年度は、同81万5000円（同18.6%高）と過去最高値となった一方で、29年度は、同76万8000円（同5.8%安）と下落に転じた。

取引頭数は、23年度以降は若干回復基調となったものの、繁殖雌牛の減少に伴い出生頭数が減少したことから、27年度は32万2608頭（同3.4%減）とやや、28年度は30万9802頭（同4.0%減）と減少傾向が続いていた。29年度は、生産基盤強化対策の実施により繁殖基盤の回復基調がみられたことから31万1418頭（同0.5%増）と5年ぶりに増加となった（図11）。

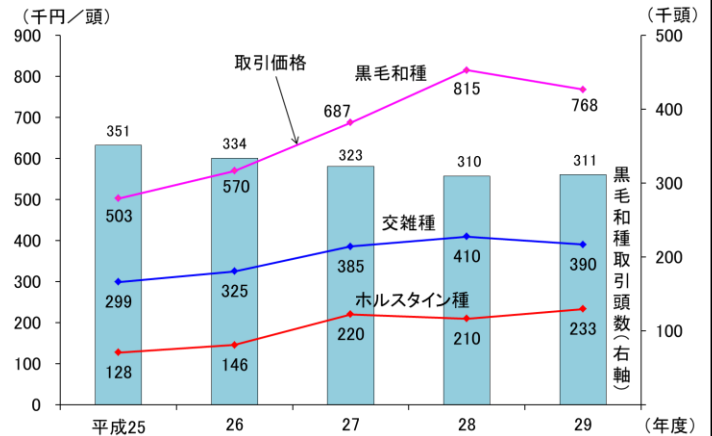
ホルスタイン種

ホルスタイン種の子牛取引価格は、平成23年度以降、取引頭数の減少により、上昇傾向で推移した。27年度は、堅調な枝肉卸売価格にも後押しされ、1頭当たり22万円（前年度比51.4%高）と大幅に上昇した。28年度は、出荷頭数が前年度を上回ったことや枝肉相場が軟調にあったことなどから、同21万円（同4.9%安）と低下に転じた。29年度は、出荷頭数が前年度を下回ったことから同23万3000円（同11.4%増）と上昇に転じた。

交雑種

交雑種の子牛取引価格は、平成25年度以降は取引頭数の減少により上昇傾向で推移し、27年度は1頭当たり38万5000円（前年度比18.5%高）と大幅に上昇した。28年度も枝肉相場が堅調であったことから、同41万円（同6.4%高）と上昇した。29年度は、枝肉相場が軟調に推移したことから、同39万円（同4.8%安）と下落した。

図11 肉用子牛の市場取引価格と黒毛和種取引頭数



資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税を含む。